

湛睿の『華嚴還源觀纂釈』について

納 富 常 天

『修華嚴奥旨妄尽還源觀』は杜順の『法界觀門』⁽¹⁾とともに、華嚴の実践觀法を説くものとして、華嚴思想史上、さらにはひろく仏教思想史上、重要な文献である。したがって『仏書解説大辞典』や、鎌田茂雄氏『華嚴学研究資料集成』にあるように、その注釈書類もすこぶる多い。⁽²⁾この中には湛睿の『華嚴妄尽還源觀纂釈』五卷(写本、三・四欠)も含まれている。これは東大寺図書館に所蔵されている觀律手沢本三卷三冊(第一・二・五)と、澄芸手沢本一卷一冊⁽³⁾(第二)の二部のうち、前者に相当する。また金沢文庫には湛睿自筆草稿本の断簡が十二紙ある。十一紙は古文書の紙背にあり、一紙は『戒本見聞集』第百に混入している。(これらは觀律手沢本と比較照合すると、第四と思われるものと、第五に相当する部分である。)その残存自筆草稿本から卷子装であつたことがわかる。しかしこれまで本書の研究についてはまったく無い。ここでは紙数の関係などもあることから、とりあえず觀律本を中

心に、本文(第一のみ。第二・五は次号に掲載の予定)を紹介するとともに、今後の専門的な研究の手がかりとして、その成立や内容などについて簡単に触れてみたい。

まず東大寺本『華嚴還源觀纂釈』が湛睿撰であるとするのは、觀律手沢本第一の内題下に「金沢湛睿抄」とあるからであるが、さらにつきぎの三つの理由から間違いない。(1)湛睿は華嚴教学の基本的なものは網羅的に注釈しているから、『華嚴還源觀』の注釈があっても当然である。(2)湛睿撰にかかる『五教章纂釈』『華嚴演義鈔纂釈』『心要纂釈』と同じく、書名が「纂釈」となっている。(3)金沢文庫に残存する湛睿自筆草稿本と、觀律手沢本(第五)を比較した場合、わずかに出入りが認められるが、ほとんど一致する。

それでは湛睿が本書を撰述した時期は何時ごろであつたらうか。残念ながらこれを証する奥書などを欠いているから知ることができない。しかし残存断簡の書体が、他の若い時期

の草稿本に類似した部分と、晩年の草稿本に類似した部分があるから、他の著作と同様に、早い時期に初稿本を染筆し、その後添削を加えたものと思われる。

ここで東大寺本について考察してみよう。まず観律手沢本であるが、書冊の形式は三巻三冊（第一・二・五）、袋綴装（縦23・9 cm 横19・3 cm 第一21枚 第二17枚 第五21枚）、無界、一頁11行、13行、一行17字、21字、楮紙、前表紙には「華嚴還源觀纂釈第一」の⁽⁵⁾外題があり、左下隅には各冊とも手沢名「観律之」がある。内題は第一・五が「花嚴還源觀纂釈」、第二が「華嚴還源觀纂釈」となっているが、第一の内題下には前にも触れたように「金沢湛睿抄」とあり、金沢称名寺（横浜市金沢区金沢町）第三代湛睿の著書であることを示している。また奥書はつぎのようにある。

（第一）

一校畢

至徳三年二月十一日於戒壇院西僧坊寫畢

小比丘春源通十二
俗三十五

（第二）

一校畢

至徳三年二月三日於戒壇院西僧坊西向寮寫畢

小比丘春源通十二
俗三十五

（第五）

一交畢

至徳三年二月八日於戒壇院西僧坊西向寮寫畢

小比丘春源通十二
俗三十五

これらにより春源が至徳三年（一三八六）二月三日から、十一日にわたり、東大寺戒壇院西僧坊西向寮において、第二・第五・第一の順で書寫したことがわかる。これはまた欠失した第三・四も、多分その前後に書寫したものと思われる。また「一校畢」とあるから、正確を期し校合したことがわかる。

つぎに澄芸手沢本は一巻一冊（第二）、袋綴装（縦28・4 cm 横21・9 cm 14枚）、外題は「還源觀抄物」、手沢名は「澄芸」とあるが、内題は「華嚴還源觀纂釈第二」とある。奥書を欠くから、筆者と書寫の時期については不明であるが、その書体から室町時代の書寫とみることができ。

また観律本の筆者春源、手沢者観律、澄芸本の手沢者澄芸は、東大寺関係資料により、いずれも南北朝時代から室町時代にわたって活躍した東大寺学僧と思われるが、いま判明しているかぎりにおいて列挙してみる。まず春源は『華嚴還源觀纂釈』以外に、『古題集類』（第一・五・六・十一 永和元年 一三七五、永和三年）、『葉上釈迦』（永徳三年 一三八三）、『随転或一具多具七支事』（明徳四年 一三九三）、『五教章下卷見聞抄下』（明徳四年 一三九三）、『華嚴宗論義』（永享十年 一四三八）などを書寫しているが、これらの奥書から春源は観応二年（一三五二）に生まれ、二十四歳に受具している華嚴の学匠であることがわかる。また観律は本書以外に『古題集類』（第一・六）を手沢しているとともに、『華嚴宗論義』（応安三年 一三七〇）を書寫している。

また澄芸は『華嚴還源觀抄物』を手沢しているほか、『華嚴新撰勸学抄三末』（永享十年一四三八）『華嚴探玄記第八末』（文安二年一四四五）、『華嚴宗論義抄』（室町期）、『俱舍抄』（室町期）を書寫し、『華嚴法界義鏡』『華嚴信種義』『華嚴五教章下卷抄断惑義下』などを手沢している学僧である。

注釈の様式は南都の伝統的な注釈方法に基づき逐語的であるが、主として浄源の『華嚴還源觀疏抄補解』に依拠しながら、博引傍証余すところがない。

引用文献は觀律本によるかぎり、『華嚴還源觀疏抄補解』をはじめ、『華嚴經』（晋經・唐經・貞元經）『華嚴經方軌』『華嚴探玄記』『華嚴演義鈔』『華嚴演義鈔會解記』『華嚴經普賢行願品疏抄』『華嚴經問答』『華嚴經綱目』『華嚴經義海百門』『華嚴經金師子章註』『心要』『注法界觀門序』『法界觀門注』『注華嚴法界觀務本記』『円覚經』『円覚大疏』『円覚略疏』『円覚略抄』『起信論義記』『起信論疏筆削記』『大乘法界無差別論疏』『十地論』『宝藏論』『十二門論疏』『理趣般若經』『般若心經幽贊』『唯識述記』『密嚴經疏』『円頓成仏論』『宗鏡録』『纂靈記』『永寿集註』『摩訶止觀』『行事鈔資持記』『四分律含注戒本疏行宗記』『仏祖統記』『妙覺塔記』などである。なお觀律本はテキストが善本でなかったか、もしくは筆者の不注意によるものか、わずかに誤字・脱字がみられる。

以上湛睿撰『華嚴還源觀纂釈』について、東大寺図書館蔵觀律手沢本および金沢文庫蔵湛睿自筆草稿本断簡により、そ

の成立や内容などについて簡単に考察したが、撰述の時期は明らかでない。しかし湛睿自筆草稿本の書体などから、早い時期に著わし、その後加筆修正したことがわかる。また内容は浄源の『華嚴還源觀疏抄補解』に依拠すると同時に、逐語的に博引傍証余すところのない南都の伝統的方法による『華嚴還源觀』の注釈である。なお本書が春源・觀律・澄芸等によって研究され、現在東大寺図書館に二部所蔵されていることは、東大寺における華嚴教学研究上重視されていたことを示すものであるが、これはまた東大寺における『華嚴演義鈔纂釈』『起信論義記教理鈔』などの受容とともに、東大寺教学に及ぼした湛睿の影響が、いかに大きかったかを証するものでもある。

註

(1) 本論集第十四号において、湛睿による『法界觀門』の注釈書『注法界觀釈文集』を紹介した。

(2) 『仏書解説大辞典』は、浄源『華嚴安尽還源觀疏抄補解』一卷、『安尽還源觀科』一卷、湛睿『華嚴安尽還源觀纂釈』五卷、実英『安尽還源觀不審』一卷、経歴『安尽還源觀筆記』一卷、南紀芳英『安尽還源觀癸亥録』三卷、伏明『安尽還源觀講前日録』一卷、持浄『安尽還源觀講録』一卷、法泉大安『安尽還源觀幽賞』二卷、竜天『安尽還源觀私記』一卷、照遍『安尽還源觀精義』一卷をあげているが、そのほかに鎌田茂雄氏『華嚴学研究資料集成』は著者不明の『甲子録』『聴記』をあげている。

湛睿の『華嚴還源觀纂釋』について(納富)

(3) 室町時代寫、縦24・8 cm 横21・9 cm、袋綴装、14枚、奥書はない。

(4) 『華嚴演義鈔纂釋』『五教章纂釋』『起信論義記教理抄』『四分律行事鈔見聞集』などは、その奥書から何回も添削していることが知られる。

(5) 第二・五はそれぞれ『華嚴還源觀纂釋第二』『華嚴還源觀纂釋第五』とある。

凡例

- 一 改行は原文どうりとした。
- 一 不明の部分は□□ □にした。
- 一 漢字は組版の都合上、井を菩薩、炎を涅槃に、虫を融に改めたもの以外は、原文どうりにした。
- 一 送り仮名は朱墨により施されているが、組版の都合上、明示しなかつた。文字は原文どうりにした。
- 一 鉤は朱で施されているが、組版の都合上、省略した。
- 一 浄源『華嚴妄尽還源觀疏抄補解』により校訂した部分は()、金沢文庫資料断簡(湛睿自筆)により校訂した部分は〔 〕を付した。

華嚴還源觀纂釋第一

觀律

花嚴還源觀纂第一 金澤湛睿抄

晋水沙門淨源法師疏鈔補解云昔帝心尊

者集法界觀門一則宗乎化教一矣澄照律

師述淨心戒觀一則宗乎制教一矣若乃化制並

宗性相互陳唯賢首國師妄盡還源兼

而有之故其円頓之機權小之流悉皆普被耳

題額中

補解云題中修之一字惣貫名一題謂本文別舉六

門一通爲一觀以前之三門一辨二用通揀情一顯解

謂一塵含容空有遍中以真空幻色一雙揀斷空

實色一第四門修四種行德爲熏習止觀方便一其第

五門入五止第六門起六觀一方爲造詣正修一由是

入一門一即全收法界一矣下之九字別申綱要一

花嚴奧旨一即所依經也○奧謂堅深與衆典一

爲洪源一也旨乃橫廣攝群一經一爲眷屬一也妄盡

還源一即能依觀也妄法無躰義說爲盡一會歸一

心一喻三派一還源一○觀者妄盡智泯本覺眞性与方法

融通之稱也然眞本不レ可以功一成一要亡歸而本就一深

源不レ可以智一得一必智盡而源成故曰觀者妄盡

智泯也下文亦云識盡見除一清涼謂情盡理現諸

見自一亡文雖一廣略有二異一義乃頓證全同上又法界

觀注尺觀字一云情盡見除冥於三法界上晋水

意全同此圭峯尺一也又演義鈔十五上云定名修者

頌云等引善一名修極能熏心故謂離沈掉名之爲

等一引一引生功德一名之爲引一此定地善極能熏心令成德

類故獨名修一已

撰号中

補解云京即長安○大薦福者唐之精舍頗衆

亦有小薦福一故以大字一揀之薦追也言爲考妣一追

福也此寺即唐中宗皇帝所造一按一按大宋高僧傳一

曰中宗有懷一罔極一追福一司心一先於長安一造薦

福寺一事不時就一作者煩勞乃勅工部尚書張

錫与律師尺道岸一同典一其任一廣開方便一博施

慈悲一人或子一來一役無一留務一費約一功倍一帝一甚嘉

之一已

翻經沙門

補解云按秘一書少監閣一朝一隱述一碑銘一云國師姓康

氏一諱法藏累代相承一爲康國相一祖自康居一來朝

又一謚皇朝贈左侍中一國師年一甫十六鍊一指一於阿

育王舍利一前一以申供養一此後便遊太白一雅挹一重

玄一聞雲花寺儼法師講一花嚴經一投爲上足一瀉

水一置瓶一之受納一以芥一投針一之因緣一名播招提一譽

流震極一屬榮國夫人奄捐館舍一未易一齋縷一

上齋音則天聖后廣樹佛乘一大開法寶一國師策

名宮禁落髮道場住大原寺證聖年中奉

勅与于闐三藏實又難陀譯花嚴經至神龍

中又同譯大寶積經唯聖之所歸依唯皇之所廻

向爰降綸旨爲菩薩戒師太上皇脫履方機

褰衣四海亦受戒法講花嚴經三十餘徧梵

網楞伽密嚴起信皆有義疏傳于四方先

天元年十一月十四日終身西京大薦福寺

春秋七十其年十一月二十四日葬神禾原花

嚴寺南帝念若驚聖情如失上

法界無差別論疏云有于闐國三藏法師

提雲般若此云天惠齋梵本百有餘部

於垂拱年内届至神都勅慰喻入内供養

安置魏國東寺共大德十人翻譯經論仍令

先譯花嚴余以不敏猥蒙徵召既預翻譯

得觀寶聚遂翻得花嚴不思議境界分花嚴經

修慈分大乘智炬陀羅尼經諸佛集會陀羅

尼經已上各一卷成造像功德經二卷法界無差

別論一卷沙門法藏筆受其餘經論並未

及譯三藏遂便遷化上

法藏述事

問選号云法藏述此事難思且孤山智円法師杜

順和尚之所作定有依憑欵又長水子璿筆

削記第十云杜順云用則波騰鼎沸全真躰以

運行躰則鏡靜水證舉隨緣而全寂是即四

德中第一德之尺也又智覺禪師宗鏡錄第一云杜

順和尚依花嚴經立自性清淨円明躰此亦引

下一躰之尺也是則杜順之所作非限于弧山諸

師一同之所判也淨源何不許此義乎答清冷圭

峯雖同引用此之觀文而不舉作之名字又上

古觀本不置撰号欵是以震旦先德實

義往是則不究始末無勘同異欵率尔呼

其名令學者混迷於是淨源師与通義師共集

諸部之觀本所記作者之實義矣仍見重

校序一挙三ケ文義海百門心經校勘文章宛似

指掌何况妙覺塔記云賢首還源觀上此記者

斐休述此斐休者清涼所面授何有所謬尤可

信仰加之知訥禪師円頓成佛論云賢首國師所

述花嚴奧旨妄盡還源觀上先德一同之義

不可異求者欵問此義尚不尔佛祖統記卷

第三十諸宗立云法師法順萬年杜氏師著法界

觀門一卷妄盡還源觀一卷專弘花嚴以授雲

花智儼儼授賢首法藏藏授法師澄觀大歴

初於傳涅槃起信論終南法界觀法藏還源記上

准此尺者觀文是杜順所制以賢首是次第付属

故造其記文、欵明知今觀文是非賢首所造也如何

答

序文分二淨源科「初惣歎教宗

初約法被機

初歎聖教超勝三——二然用下別明躰用三——二其猶下約喻貼釈

三得下會別歸惣——三既覺下機宜權益

二竊下叙九情難曉四

初義深回窮——初統括經旨

二是下以機淺妄執——二明者下解惑由機

三今者下興懷述觀四——三輒以下刪補群典

四冀返下迷者悟道——四雖則下縱大奪略示

愚案云今序分二初惣歎大經超絕、二竊見下正叙觀

門奧意、初中爲三初約法所論、二然用下就機、曲分三

故得下會機歸法

滿教難思乃齊彰事

補解云滿教即花嚴也文出北本涅槃經、彼經明半

字即小乘滿字即大乘已上、然愚推云此是晉經

法界品之意、欵謂彼第五十五明善賤所遇之五十

五聖中大願精進力救護衆生主夜神曩昔劫奉

逢佛所聞之經、名曰滿經、即今花嚴經是也故天

台止觀第一云花嚴曰娑伽羅龍車軸雨海餘不堪

爲上根人、說曰滿修多羅、二乘如龍如瘧已上、又

補解云或問滿教与円宗、其旨何異答大疏

曰夫立教必須斷證階位等殊立宗但明所尚(宗)

差別故有不同耳已上

問今標所依本經之超絕而何無一塵等、祖歎之

哉且一塵者若依大乘、則非有實躰者、只是

觀行人爲遣、諸法實有執、故漸次除折、麁色

至不可朽、假說極微、爲色邊際、即是有漏智

假相之觀境也、小乘謬執謂有、實躰、而其實無

法也、今何指、此妄法、以爲円滿教之宗法、有何意

哉、答今經以法界緣起、爲宗者不足始論、故妙

樂云以法界論之、無非花嚴、以佛惠言之、無非法花、已

其法界者、森羅万法、一各躰即法界也、然經中

多舉一塵、明稱法界、具無邊德之旨、故唐經第

七世界成就品云法界國土、一塵諸大刹海住、其中一佛

雲平等、悉弥覆於一切處、咸充滿、同第八花

藏世界品云花藏世界品有塵、一塵中見法界寶

光現、佛如雲集、此是如来刹自在、已上、晉經第四

云於此蓮花藏世界海之内、一微塵中、見一切法界、

已上、探玄記釈云觀帝網法界、已上、貞元經第四十云

於一塵中塵數佛各處菩薩衆會中無盡法界塵

亦然深信諸佛皆充滿、一經中此語充遍行句、

不遑毛拳、是故祖師別就一塵、殊明法界円融

義、略如三下、三偏中尺廣、如義海百門、此大意者如

晉經第 清淨法界一具足無量義已其無量

義者且歷諸宗明之者若約一塵全真從本已

來不生不滅不去來等之義是名八不生正觀又

不知此小塵全真約其迷心即所執性也既許有

漏智假想之觀境是依他性也塵無自性稱性円

通即円成実也三性法門依此而立又緣起故假

無性故空全真故中統歸一心是名一心三觀又四大

所成故無性虛通故真心全觀故具六大義餘

如下三偏中明以之思之諸教所談纒迷一義未盡

一塵所具無量義故非難思亦成漸現但今經獨

窮法界幽微盡無量玄義故云難思亦云頓現

即是一言標歎円經之超絶者也

然用就躰分等事

私云上來大同演義云一眞法界本無内外不属一

多佛自證窮知物等有已上今即標一塵法界深

廣無際之旨例准知之 自下

亦同彼云欲令物語義分心境等但彼尺照廓

心境之疏文例成円經題名故於無量義中但

且分爲心境也然今由專明修止觀故且分爲躰

用也即補解尺云然者不定之辭用就躰分

即止之觀也非無差別之勢謂觀照性相也故

義海之標躰開用助道之器蓋多就性明緣

差別之勢不一事依理顯即觀之止也自有一

際之形謂止息万緣也義海又謂法無分齊現

必同時理不礙着一隱顯一際已上

其猶病起藥興等事

私案云上明分躰用教止觀者併爲令物斷

迷開悟故自下約喻默尺也補解云其猶下

文有六句初二句法喻雙標次二句尺喻後

二句尺法按無相集病有二種一緣慮二無記ナリ

緣慮者善惡二念也雖復差殊俱非解脫是故

惣束名爲緣慮無記者雖不緣善惡等事然非

真心但是昏住他宗執無記爲真心何藥亦有二種一

寂二惶寂謂不念外境善惡等事惶謂不生昏住無記等相是故

以寂治緣慮以惶治昏住亦止觀二行治之

即前妄生智惠也然妄生則煩惱所知二障智立

則如理如量二智如理知破煩惱即無緣慮也如量

智破所知即無昏住也至病妄藥妄下二句尺喻

也謂昏散兩病既妄則止觀二藥亦妄故以空拳

喻藥妄也止啼病妄也潜夫曰譬若握空拳以

誑誘於孺子也厥或呱之泣既止則開拳舒

手豈有物耶孺謂疾孺呱音弧聲也心通法

通下二句尺法也謂心通則二智俱絶法通則

二障雙亡^ヲ 智障寂然物我冥一故引虛空

以喻性偏也^{已上}

既覺既悟^(事脱)

補解云謂昏散之妄已覺 頓除^(現) 則理量之智

亦悟齊泯^{スルヲ} 故云何滯何通也^{已上}

百非等事

補解云百非者肇法師謂但有一法^{トキハ} 則名爲非^ト

法不止一^ト 故云百非^ト 攀緣者以妄想微^{(相)微} 動^{ルヲ} 攀緣

諸^{シヨ} 法^ヲ 也筆削記又謂百非者此於有無一異 四句

上^ニ 明^ス 之^ト 謂有非有亦有亦非有非有非有^ト 有爲

一四句^ト 无等例此^ヨ 共成十六^ト 又過現未來各

有十六^ト 成四十八^ト 已^ト 起未起^ト 各四十八并根本

四都成百非也^乃 今由心通法通^シ 絕慮^シ 亡言^ス 枝葉

百非皆泯^ス 由根本四句頓亡^ニ 文

故得藥病^至 而歸法界事

補解云此文以靜定^ニ 喻藥^ニ 以動亂^ヲ 喻病^ニ 斯則隔

句^ヲ 會別^ヲ 歸惣^ニ 謂能藥所病雙泯^{トキハ} 則證入玄

宗^ニ 靜性亂相俱融^{トキハ} 則復歸法界^ニ 已上 此法界者

初所標舉一塵法界也 愚案云若以題中十

字惣配序文一段^ニ 者自滿^{マム} 教難思^ニ 至一際之形^ニ 者

修花嚴奧旨也於中初明花嚴奧旨^ヲ 然下明修^ニ

也次其猶下妄盡還源也於中^ニ 初明妄盡^ヲ 故

得下明還源也後竊見下觀也

竊見^乃 其際事^至

愚案云自下正統觀門興意四初明義深叵窮

等如淨源科應知補解意云今文有四句初句

能詮教也次句所詮義也第三句尺上能詮第四句

尺上所詮^ヲ 意云私竊見大經教義^ニ 深玄難窮^爲

是以真空^乃 名相之境事

自下明機淺妄^至 執^ト 也補解云真空即能觀之智

故滯於心首^ニ 實際即所觀之境故居於目前^ニ

且真空無念^ト 起^ス 恒爲緣慮^ト 實際無形^ト 生翻

作^{ナス} 名相^ニ 故寶藏論云眞智隱於緣慮之內^ニ 法身

隱於形殼之中^ニ 已上 意云本有真空無相智性隨緣滯

心首^ニ 故今成妄想^ト 即無正智^ニ 迷眞如實相^ニ 故成

名相境^ニ 如^ク 則隱^レ 名相^ト 則顯^レ 此依楞伽經等所說

相名分別正智眞如之五法^ニ

尺之故疏二上云迷如^ニ 以成名相^ヲ 妄想是生悟名相

本如^ニ 執翻^テ 成智^ト 如外無智^ト 躰即如此^ニ 猶空^ニ 寂

照無導^{已上} 妄相者亦名分別^ニ 鈔六上云迷如

等者此顯迷時唯有三法^ニ 一名二相三妄想故

此五法通該一切^ニ 而不無同時^ト 今有妄想^ニ 便無正

智^ニ 其如^ク 名相則有隱顯^ニ 此中迷故如^ク 則隱名

相則顯次云悟名相本如執翻^{カヘテ} 成智^{スト} 者此顯^{イハ} 悟

時、但有其二、一正智、一如、既有正智、決無妄想、得了得如、一名相則隱、已上會解記第三云、名相不生、

境如実妄相不生、則心如実了、スル心境如是爲正智、故唯正智及如、存已上問九云、眞空、者是無性之

空理、故可爲所觀之眞、如今抄云、眞空即能觀之智、乎又義海百門云、徹言滯心首、云既云徹言、明知非能觀之智云事、答昇兜率天品云、

探玄記第七云、通得上佛諸德、惣名虚空智、惠以鑒照名惠、則惠稱性、一味無限無導名空、明此衆智、達其際名如是至也、已上准此能觀之智稱性無導

亦應名眞空、不可局執也、已上但於義海百門尺者、一義云、眞空者本覺眞心也、法界觀尺眞空觀云、今者統収玄奧等事、

自下三興懷述觀中、亦分爲四、初依括經旨也、一義云、即此円經文廣義豐、ナルカニ故今依括爲六門、故云統収玄奧等也、然此六門直指衆生情塵、顯

出佛智境界、且出現品所説、應知又此六門所轉之法輪、即於一毛端處而轉如、前序之觀懺、毫以奇彰、又下三遍並於一塵上、ニ明無邊法義、

者是也、故云轉法輪於毛處也、意云、今此六門出經卷於塵中、轉法輪於毛處者也、爲言一義云、今統括爲六門者、爲令人依行出經卷於塵

中等、爲言但轉法輪者可通爲自爲他之二轉、明者德隆、乃至錙銖難入事、

自下二解或由機也、補解云、明者德隆、於即日示其頓機、也行願疏云、得其門、則等諸佛於一朝、梵行

品云、若諸菩薩能與如是觀行、相應於諸法中、不生二解、一切佛法疾得現前、初發心時、便成正覺成就惠

身、不由他悟、此亦無心躰極一念便契佛家、昧者望絕、於多生示其漸悟、也行願疏又曰、失其旨、則徒修、因於曠劫、出現品云、設有菩薩百千億劫、具行六波羅

密、若不聞此、如來不可思議大威德法門、或時間已不信、不解、不順、不入、不得、一名爲眞實菩薩、此亦有作修多劫、終成敗壞、也會旨、山獄易移、喻前頓機、乃至乖宗、錙銖難入、喻前漸根、已上

資持中二云、孫子筭經云、數之始起爲忽、即蚤口十初糸也忽爲絲、十絲爲毫、十毫爲釐、十釐爲分、十分爲寸、十寸爲尺、十尺爲丈、十丈爲引、六

尺爲步、二百四十步爲畝、百畝爲頃、文同下二、鉢器篇云、二十四銖爲一兩、文同下二、鉢器篇孫子筭經云、十粟爲圭、十圭爲抄、爲撮、十撮

爲勺、等文行宗記三上云、孫子筭經云、數之始起於忽、蚤口初糸十忽爲絲、乃至十丈爲引、四丈爲疋

五丈爲端、皆應炬周、度數也。

輒以_{乃至}之妙旨事

自下三刪補群典也、補解云、輒者專也、旋披謂

徧尋也、往誥即晉譯之經誥者、告也、告示、令曉也、

紆覲謂遠覲也、舊章即古之章疏、章者明也、各明

其義也、備三藏之玄文、者、夫經律論之三藏、即戒

定惠之三學、下之第四門、明四種行德、即戒學也、第

五門入五止、即定學也、第六門起六觀、即惠學

也、然此觀門、正攝惠學、兼收戒定、正攝惠學、

者、此有二說、一約本文、別舉六門、通爲一觀、

二依別錄、謂發心修時、曰觀、任運成行、曰惠、

故以惠學爲正也、兼收戒定、者、謂先以四種行德、

爲方便、次以五止、爲造修、故戒定爲兼也、_{已上}

自下取意引之、謂令本文多引起信、正屬論藏、

兼引經律、故知惠學爲正

憑五乘之妙旨事

補解云、憑五乘之妙旨者、_(戒脫)一人乘謂三歸五

運載衆生、越於三途、生於人道、二天乘謂上

品、十善及四禪八定運載衆生、越於四洲、達

於上界、三聲聞乘謂四諦法門、四緣覺乘謂

十二因緣法門、五菩薩乘謂悲智六度法門、

若推觀中、五乘之義甚隱、今以二義通之一

據現文、互攝、二依大疏、寄乘、然觀中現文、唯明三

歸五戒、是出苦海、之津梁、趣涅槃、之根本、_出

苦海、即攝前、二謂人乘、天乘也、趣、涅槃、即攝後

三、謂聲聞緣覺菩薩也、○若依清涼十地疏文、初

歡喜地、二離垢地、三發光地、此三、寄世間人天乘、

四、燄地、五難勝地、六現前地、七遠行地、此四、寄出世

間三乘、故後依大乘、_{疏歎}寄乘以攝之、_{已上}

問此二義中、初義應知復義、意如何、答大疏、一上云、然

此教海宏深、包含無外、○語其橫收、全收五教、乃至

人天、惣無不包、二、方顯深廣、○十善五戒、亦、円教攝

尚非三四、况初二、耶、斯則有其所通、無其所局、故

此、円教語、廣名無量乘、語深唯顯一乘、_{已上}意以花

嚴、是根本法輪、_{ナルカ}故包含、無外也、若不包含者、何

得於一佛乘、分別說三、哉、故大疏六上、_{十地}云、三宗趣者

先惣後別、惣有二義、一以地智斷證寄位修行、爲

宗、以顯、円融無導行相、爲趣、二前二、皆宗、爲成佛

果、爲趣、復別者、前於上惣、略有十義、○九約寄

乘法、謂初二三地、寄世間人天乘、四五六地、寄

出世三乘、八地已上、出、世間、是一乘法、故以諸乘

爲此、地法、_{已上}抄十三上云、初地、明施復、顯人王、即

是人乘、二地、十善、と、生天、是欲天乘、三地、八

相_二爲觀門_一不_レ了_二三聚_一豈知離垢之名_二不曉八禪_一寧知發光之行_二四地道品_一○五地諸諦○六地般

若○非是懸指昔_二中權乘所見_一等文是即

寸簡_下法花經所_レ舉_二法相_一懸指昔_二中權乘

所見_二故云非是等_一也准此等尺_二會觀明四德_一中或

引瑜伽四分等權教_二或勸_一三歸五戒等小乘_二全

非_三是指_二權機所見_一之所局_二法_上並是正約_一円教該

攝之所通_二法_上故云五乘之妙旨_一爲_レ言_二題名_一云奧旨_二今

即云妙旨_二實是一宗_一之妙不可思議_二淨源

問十善五戒亦円教攝者唯攝所乘之法_二欵爲當

通攝能乘之人欵答

雖則創集無疑事

纂靈記第四云僧法藏字_ハ賢首○母夢異光_二而孕

及生而纂無上_二年十七_一辭親求法於大白山_二○時

儼法師於雲花寺_二講花嚴賢至中夜忽見神

光來燭庭_二字_二賢歎曰當有異人發弘大教及

明及遇儼公_二自是伏膺深_レ入無盡_二及儼將去

世_二首尚居俗謂諸德_一曰此賢者蓋無師自悟願

假余光_二共成佛事_一大法興茂其唯此人_上

窮茲性海_二至_一際皎然事

補解云覺性如海_二語其_レ深廣_一也妙_レ一行如林_二言其高

也參而不雜_二尺上_一別舉_二六門_一際皎然_二尺

上通爲_二一觀_一謂一眞實際皎然_二明白_上已上

行林事 探玄記第六云_二夜摩偈_一菩薩聞名林者表行_二法界之行_一成

法界之德_二德高_一方樹_二行廣_一稱林_二十度鬱_一齊

修_二万行森然_一讚發法況相似故名爲林_文

佩_二道_一君子事

補解云佩道猶_レ負_二道_一也珮者玉之帶_二礼曰凡帶

必有佩_二道者性德之本斯_一須不可離之_二非佩_一而

何_二君子_一者仲尼謂魯哀公曰言必忠信而心不

妄_二仁義在身_一而色不伐_二思慮通明_一而辭不專_二篤

行_二信道_一而自強不息_二此君子_一儒也

別名中

補解云意云然此_二六門生起有_一緒_二生佛迷悟莫_一先_二本

躰_二故初_一授_二之_一○即花嚴一眞法界也次躰性開發存

乎妙用_二故第二明起用_一即有二用_二初明自性深廣

次弁隨緣成德次依於妙用塵_二普周故第三

示偏_二此有三編_一初明塵性依眞_二二明依眞起

用三明明用交參_二次依偏境而修行業故第四

授行德_二此有四德_一初多示悲心利他_二多誠智躰

自利三悲智雙流自他俱濟四唯大悲利他普

救群品次行德在躬以止調心故第五授大止此有

五止_二一正顯法空_一二兼明人空_三會緣歸寂四

寄功忘照(融)五寂照雙泯次止門雖寂而觀心常照故
第六授妙觀(此有六觀)一顯出法身二修成報身
三報無礙四一智現多五多身入一六一多同時身
智無盡

一義云

問此六重觀與賢首品十大三昧其相攝如何

答解尺多塗且引補解一尺彼云然此六重

觀即賢首品中明普賢德徧一切時處無方大

用十三昧門一円明海印三昧門二本微妙行三昧門(華嚴)

三因陀羅微細三昧門四手出廣供三昧門五現諸

法門三昧門六四攝攝生三昧門七俯同世間三

昧門八毛光照益三昧門九主伴嚴麗三昧門十

寂用無導三昧門若以六重觀門攝此十門

三昧者一顯一躰(據)即攝第一円明海印三昧門

以下文依名別示中謂若處一躰爲名即是

海印炳現三昧門又二起二用初海印森羅常

住用引經二偈亦攝第一円明海印三昧門二法界

円明自在用引經二偈即攝第二花嚴妙行三昧

門此依清涼科經攝之又上四偈中復攝三門二

攝第四手出廣供三昧門以正引偈云嚴淨不可

思議刹供養諸(切脫)如來今第四門偈謂能以一手

徧三千普供一切諸如來二攝第七俯同世間三

昧門以正引偈云或現童男童女形隨其所樂
悉令見今第七門偈謂或現梵志或國王人天
等類同信仰三攝第八毛光照益三昧門以正引

偈云放大光明無有邊度脫衆生亦無量今

第八門偈謂放大光明不思議令其見者悉

調伏三示三徧即攝第三因陀羅網三昧門以

文中謂一塵既具當知一塵亦亦今第三門偈

云如一塵中所示現一切微塵悉然四行四德攝

其二門一攝第五現諸法門三昧門以四德中具明四

攝也今第五門偈諸菩薩住在三昧中或以四攝利

益門二攝第六四攝生三昧門以下文依名別

示中謂若準四德爲名即攝生三昧門五入五

止即攝第十寂用無導三昧門以依名別示中謂

若約五止而言即爲寂用無導三昧門六起六

觀中主伴互現帝網觀即攝第九主伴嚴

麗三昧門謂文中以自爲主望他爲伴如善財

合掌在彌勒前今第九門偈云譬如明月在星

中菩薩處衆亦復然此中引經或取文義相類

故其句偈有前後耳若觀舊疏但將二起二

用對初之二門下之八門皆無攝屬是知花

嚴奧旨將興賢首不得不作賢首遺風將絕

清涼不得不生庶習茲觀者推經孝疏則

湛睿の『華嚴還源觀纂釈』について（納富）

合十門之三昧ニ爲六重之觀法ニ無以尚於此マサレル矣

次上裏書云問今觀末文及演義抄等並以此

六門ニ配尺賢首品十大三昧ニ示者今觀門專宗

賢首一品ニ可云欵答補解尺第三編中云理事

無尋事ニ無尋之文云

一校了

至徳三年二月十一日於戒壇院西僧坊寫畢

小比丘春源通十二
俗三十五

（付記）

(1)資料の最初から十八行目「要亡ヌ歸ヲ」の「歸」の右側に「功ヲ」と傍注してある。

(2)東大寺図書館新藤佐保里氏にいろいろ御教示を頂きました。厚く御礼申し上げます。